

令和3年度 医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業
(アフリカにおける顧みられない熱帯病 (NTDs) 対策のための国際共同研究プログラム)
事後評価
課題評価委員会における評価コメント

研究開発課題名	西アフリカにおけるブルーリ潰瘍とその他の皮膚 NTDs 対策のための統合的介入
研究開発機関名	帝京大学
研究開発代表者名	鈴木 幸一

本研究開発では、日本とコートジボワールのインターアクティブな研究協力体制を通して、ブルーリ潰瘍とその他の皮膚 NTDs 対策のための統合的介入法の確立を次の4つの分担課題により目指した。1) 迅速診断法の開発と評価、2) ブルーリ潰瘍とその他皮膚 NTDs の感染経路の解明、3) ブルーリ潰瘍と皮膚 NTDs のための統合型サーベイランスの構築、4) 包括的創傷マネジメント法の確立。

本研究にて開発された高感度 LAMP クロマトグラフィー法は、あらゆる感染症において即応性が高く、簡易迅速診断技術の発展に寄与するものであると評価された。また、潰瘍を始めとする皮膚創傷の適切な治療方法を動画マニュアルにし、遠隔皮膚診断アプリ「eSkinHealth」が入ったタブレットとともに配布することで、ブルーリ潰瘍だけでなく現地で蔓延するその他多くの皮膚疾患の診断・治療が可能になった事は、これらの疾患の対策に貢献するものである。

一方、当初計画では対象地の臨床検体を用いて LAMP クロマトグラフィー法の検証を現地にて行う予定であったが、COVID-19 により渡航ができなかった為、検体を日本に輸送して検証をする手続きを進めたが、様々な制約のため研究開発期間内に評価することができなかったとの事。また、感染経路に関する研究については、コロナ禍において現地リソースが限られてしまい環境検体等を収集して核酸抽出後に日本に送るなどの手立てで現地検体の解析を実施するなどの方策が取れず、国内環境サンプルの検証に留まった。そして、国内で得られた成果を環境条件の異なる他の地域に演繹することには更なる検討の余地がある。

COVID-19 による渡航制限により現地活動が制限されたが、タブレットや動画を用いたりリモートでの共同研究の取り組みを発展させ、現地に研究実施のオーナーシップを持たせる、国際共同研究の新たなスキームが確立されたように見られた。本研究開発の枠組みおよび体制は、ブルーリ潰瘍対策としての確かな方向性で取り組まれていた。今年6月に発行された WHO グローバル・アジェンダに eSkinHealth がグッドプラクティスとして紹介されたことは評価に値する。また、SkinNTDs 対策のストラテジック・フレームワークにも参加しており、今後、本研究開発がブルーリ潰瘍の対策を牽引していくことが期待される。LAMP クロマトグラフィー法を用いた診断キットについても GHIT Fund から支援を受けており、グローバル企業との提携も計画されていることから、十分な検証を行った上で、社会実装に向けた取り組みを着実に進められることを期待する。

以上